

個の気づきや感じとりを生かす国語科の授業

1 個の気づきや感じとりを生かす ～個別学習～

(1) 問いの質

学習における問いに対する答えには、大きく2通りのものがある。一つは、答えが決まっている。あるいはある程度限定されるもの。もう一つは、答えが決まっていないものである。市販のテスト等にあるものは、前者に当たると考えることができる。この場合、知識・理解を手がかりとして、問われていることにいかに的確に答えるかが求められるので、子どもなりの感じ方や表し方が出しにくい。このような学習を積み重ねてばかりいると、自分なりの感じ方を大切にされた思考力や、豊かな表現力を育てることは難しい。

一方、後者の場合、子どもの見方や考え方が生かされるものの、曖昧なままに終わることが多く、評価が難しい。答えには、一致するかどうかは、必ずしも問われないが、適切かどうかの判断は必要である。その判断もつかないような漠然とした問いでは、子ども自身も満足感を持ってない。

国語科の学習では、答えの根拠を本文に求めることが原則である。子どもの見方・考え方が自由に表現できて、しかも本文を離れることのない問いの工夫を試みた。

(2) 実践「麦畑」(光村5上)

子どもが主体的に学習を進めることができるための手だての一つに、個別学習がある。初歩的な個別学習では、学習方法をプリントしたカードを子どもに渡し、子どもはその記述に従って学習を進めるという方法がとられることが多い。これをもとに、子どもたちは、たとえ教師がいなくても自力で学習を進めることができる。いずれは、このようなカードがなくても自力で学習を進めることができる、いわゆる「自己教育力」のある子どもを育てたいと思っている。

5年生の題材「麦畑」は、すぐれた情景描写とともにそれに感動する登場人物の心情を読み取ることによって、自然の美しさや豊かさに感動する心情を養おうとする単元として位置づけられている。一人ひとりの見方や感じ方を生かすために、ぜひ個別学習を重視したいと考えていた単元である。

そこで次のページに示すようなカードを配布し、個別学習として取り組ませることにした。

2 自ら学ぶ力を育む ～問題作りの学習～

(1) 自己教育力

教育が学校教育に限らず、生涯教育という広い概念でとらえられるようになってから久しい。求めて自ら学ぶ能力や態度を育てることが、就学年齢を過ぎた後も学び続け自己を高めて、充実した人生を送るとともに、積極的によりよい社会を創造していくことにつながっていくと考える。

自ら学ぶ力＝自己教育力を育てるために、学校では、具体的にどのような学習をしていけばよいのであろうか。

(2) 実践「大造じいさんとガン」(光村5上)

5年生の教材「大造じいさんとガン」は、老狩人とガンの群れの頭領とのかけひきや心の交流を豊かな情景描写とともに描かれた作品である。その情景描写から大造じいさんの心の動きを読み取らせたい。

集団としての学習に先立って、個別の読みを行わせるために、問題作りの学習に取り組ませた。1問1答式になりがちな問題の質を向上させるため、いろいろな答えが出るような問題を作るよう意識して臨むようにさせた。子どもたちが作った問題に次のようなものがあった。

①決まった答えが出るタイプ

- ア 大造じいさんはどこに住んでいて、何才でしょう。
- イ ガンの群れを率いるのはだれでしょう。
- ウ どうして「残雪」という名前がつけられたのでしょうか。
- エ 大造じいさんはなぜ「はてな。」と言ったのでしょうか。

②複数の答えが出るタイプ

- ア うなぎつりばりをしかけた時、大造じいさんはなぜなんだかうまくいきそうな気がしたのですか。
- イ なぜじいさんは夢中でかけつけたのでしょうか。
- ウ 残雪が頭領らしい所を1段落の中からぬきだしましょう。
- エ 大造じいさんは特別な方法を失敗して、どんなことを感じていますか。

③はっきりと答えが出ないタイプ

- ア どうして大造じいさんはガンがりに夢中なのですか。
- イ ガンたちは、仲間がつかまえられたときどう思いましたか。
- ウ 大造じいさんがガンをつかまえるのに失敗したときの気持ちは？
- エ あまりりこうなほうではないといわれているガンがなぜあの小さい頭にたいしたちえをもっているのでしょうか。

①のような一問一答式の問題は、学習を重ねる度に減っていく傾向にあり、子どもたちに意識させることによって、問題の質を向上させることはできるようだ。これらの問題に対し、子どもたちは自問自答の形で解答をノートに書き込んだ。自分の問題を発表し、友だちに解答を言ってもらうことで自分の解答と照らし合わせ、その適否を自己評価できるようにもなる。

②や③の問題については、一人が何通りかの解答を想定しながら作っているものも見られ、一通りの考え方にとらわれず、いろいろな角度から考えながら、解答を導き出そうとしたものと思われる。「これでよいだろうか。」「もっとほかの考え方はないだろうか。」と自分自身に問いかけてみる。この学習姿勢が主体的な学習者を育てる上で大切であろうと考える。

3 自然の中で感性を育む

(1) 子どもにとっての短歌・俳句

短歌や俳句にある七五調のリズムは、日本人の言葉の感性によく合うものであり、スローガンやキャッチコピーなど、私たちの日常生活に広く採り入れられている。子どもはこのような七五調のリズムには、生活の中で何度か出会い、無意識のうちに親しんできているはずである。取材や構想などの手間がかからず、作品が短時間にできるために、作文に比べ、とりつきやすい。文学的な質を要求しないのであれば、言葉の遊び的な感覚で楽しむことができる。このように気軽な形で学習をしていくことが、入門期の学習としては適当と思われる。

(2) 「山の学習」での取り組み

本校には、6学年の五月中旬に道後山で2泊3日の「山の学習」という伝統的な行事がある。自然の中で仲間と協力しながら生活することで、心を鍛え、自然の豊かさを学ぶ機会となっている。この機会によい環境の中で、自然を織り込んだ短歌や俳句を詠むことは、子どもながらに豊かな文学体験ができるものと考えた。短歌や俳句には、自分で詠む楽しみ方がある。子どもなりに、感じるままに言葉を操る経験をさせたいと考え、創作活動にも取り組ませることにした。さらにそれを学校行事とからませて指導していくことは、子どもたちの関心や意欲をかきたてる上で有効であると考えた。

(3) 子どもの作品から（俳句）

きりの中 頂上めざす 子どもたち
五月雨の 水したたりし 山の中
新緑の 命あふれる 道後山
道後の山は 緑がもえる 心も燃える
道後山 小鳥さえずる 夏の朝
山歌い みんな楽しい 初夏の午後
星空に 真っ赤な炎 燃え上がる
空見れば 天までこがす 火の粉かな



4 表現力を技能の面から見直す

(1) なぜ音声言語を重視するのか

平成元年版学習指導要領では、音声言語の指導が重視されている。私たちの生活は個別化が進み、多くの人とかかわらなくても済むようになってきている。集団遊びや集団討議という経験が少なくなっている。それとともに、人とコミュニケーションをとることが苦手な子ども、自分の意見が持てない子どもが増えてきているように感じられる。

学習指導要領・国語の基本方針に「情報化などの社会の変化に対応するため、目的や意図に応じて適切に表現する能力と相手の立場や考えを的確に理解する能力を養い、思考力や想像力及び言語感覚を育てるようにする。」とある。社会の要請を受けて、学校教育の場で、音声言語の能力をつけることが重点課題とされるようになったのである。

(2) 実践「解説者になって」(光村6上)

生活の中で興味・関心ある事柄が増えてくると、それを紹介したり、相手に納得させたいという欲求を持つことが多くなる。いくら感性が豊かでも表現の技能がなければ、その欲求を満たすことはできない。言語の教育として、感性を育むことと並行して、言葉を媒介とした伝達の技能を子どもが身につけるような指導がなされなければならない。

① 構想メモを作る

発表構想表		名前
必ず伝えたいこと	伝えたいこと	念のため考えておくこと
初めに	注意すること	
材料について	うわさの	
中身はどんな物でもいいこと	味かどうかわからないこと	
終わりに	盛りつけ方	念のため考えておくこと
エッセイの友	フリート	念のため考えておくこと
オレんごの友	切りア	念のため考えておくこと

「初め、中、終わり」を横軸に、「必ず伝えたいこと、できれば伝えておきたいこと、念のために考えておくこと」を縦軸に表を構成し、発表の構想

を立てることができるようにした。また、それぞれの欄に必要な応じて接続語を書き入れるようにし、事柄を区切りながら順序よく発表できるよう配慮した。なお、表には付箋紙を貼り付けることによって、後で順序の入れ替えが容易にできるように工夫してある。

② 発表の評価

発表者	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	備
		金魚	水天	セリイ	カキキ	クキ	オーストリア	オーストリア	ヒーバー	ガ・ニア・アリンズ	風
		金魚	水天	セリイ	カキキ	クキ	オーストリア	オーストリア	ヒーバー	ガ・ニア・アリンズ	風

話し方・聞き方の学習
名前

話し方では「声の大きさ、視線、言葉の使い方、区切りのつけ方」を、聞き方では「態度よく聞けたか、自分の意見を持つことができたか」を視点とし、自己評価と相互評価をするようにした。評価項目が多いのが難点だが、縦軸で個別の能力の傾向を見たり、横軸で友達と比較することもできる。

後日、「研究発表会」(光村6下)での実践の際に、評価項目を示さず、自由記述で評価するようにしてみたところ、次のような記述が見られた。「M君はみんなの方をできるだけ向いて発表していたのでよかったです。私はできるだけみんなに聞こえるちょうどよい声を出して呼びかけるような感じで言うことができたのでよかったです。」

自分なりに観点を設定しながら、友達や自分の発表を評価していることが伺える。このような経験を繰り返しながら、発表の技能を身につけ、表現への自信を持つことを願っている。(福島 靖之)